



Title	ブリトマート考察 : 甲冑と金髪との間で
Author(s)	山津, かおり
Citation	Osaka Literary Review. 1985, 24, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25534
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブリトマート考察

—甲冑と金髪との間で—

山 津 かおり

『妖精の女王』の第三巻『貞節』の巻に、主に登場するブリトマートの特徴的なシンボルは甲冑と長い金髪である。特に、彼女が時折、私たちにを見せてくれる、金色の輝きを放つ髪は、私たちの心を引き付けて離すことではない。甲冑から金髪へ、金髪から甲冑へ、その揺れ動きは、エピソードが多く、多様性に富むこの叙事詩に微妙な変化を与えている。そして、この揺れ動きを通して、私たちは、永遠へのあるヴィジョンを垣間見ることができるのである。

男性原理を示す甲冑と女性原理を示す長い金髪、この二つのシンボルを、一人の女性に持たせることによって、スペンサーは、まず第三巻で、女性の寛容で、しかも、節度のある愛“Chastity”を寓意的に示し、さらに、その愛を、第四巻、第五巻で、それぞれ、“Friendship”, “Mercy”に発展させている。

この小論文では、ブリトマートにおける甲冑と金髪という二つのシンボルの使われ方と、その意義を追っていくことによって、彼女の統合的機能を考察してみたいと思うのである。

ブリトマートが甲冑を身につけて、自分の夫となるアーティガルを探すために旅に出ることになった原因は、魔法の鏡を覗いたことにある。この鏡は、鏡を見る人が望むことを映し出すものである。

But as it falleth, in the gentlest harts
Imperious Loue hath highest set his throne,
And tyrannizeth in the bitter smarts
Of them, that to him buxome are and prone :

So thought this Mayd (as maydens vse to done)
 Whom fortune for her husband would allot,
 Not that she lusted after any one ;
 For she was pure from blame of sinful blot,
 Yet wist her life at last must lincke in that
 same knot.¹⁾ (3.2.23)

彼女が興味を抱いたのは、未来の夫がどういう人かということなのである。ここで注意しておかなければならないことは、彼女が、運命によって定められた夫に興味を持ち、自分の人生は結婚の絆で結ばなければならないと考えていることである。そして、彼女は、受け身の愛を代表するアモレットと積極的な愛を代表するフロリメルのちょうど中間に位置する存在²⁾であると考えられる。彼女は、運命で定められていることを受け入れて、未来の夫の影を一途に恋する女性として、最初は描かれている。

鏡を見た後のブリトマートは、普通の乙女の恋煩いの比喻で描かれ、恋愛のことで人生の先輩と言える乳母グローシに導かれ、マーリンのもとに連れて行かれる。マーリンは、ブリトマートがアーティガルと結婚した後のことから、処女王エリザベス一世に到るまでの苦難の歴史を物語りながら、彼女が魔法の鏡を覗き込んだのは、“wandering eye” (3.3.24) のためではなく、“the streight course of heauenly destiny” (3.3.24) によるものだと言ふ。

ブリトマートは叙事詩的愛の実現者の一人なので、普通の恋愛状況とは違うにしても、限界のある人間には見ることのできないものを見てしまったと言える。その見えすぎによる混乱状態をマーリンが鎮め、神の摂理だと知らせてくれても、その言葉をかみしめ、気持ちを調整して、決断を下すのはブリトマートの問題として描かれている。

マーリンは、彼女の運命について、以下のように語っている。

Indeed the fates are firme,
 And may not shrinck, though all the world do shake:

Yet ought mens good endeouours them confirme,
And guide the heauenly causes to their constant terme. (3.3.25)

このマーリンの言葉に力を得たブリトマートは、グローシの助言もあって、敵方のサクソンの女王アンジェラの鎧を身につけ、昔、ブリトンの王ブライダットが作った魔力のある槍をもって、旅に出ることにするのである。この時のブリトマートは“generous stout courage” (3.3.57) にあふれた女性として示されている。

旅に出たブリトマートが一戦を交える最初の騎士は、第二巻『節制』の巻を代表するガイアンである。ガイアンは、彼女の槍の威力に屈し、落馬してしまうのである。彼の敗北について、Maurice Evans は、以下のよう

The ebon spear of Britomart unhorses him because it has behind it the whole force of Nature; it has the emblem of the love of God by which the universe was created and is maintained, and its power springs, therefore, from a higher and more mysterious reason than even Guyon can attain to.³⁾

確かにブリトマートの槍には、不可思議な力がある。そして、この槍の所有者であるブリトマートは、アーサー同様、神に守られた存在なので、ガイアンが負けてしまうのも無理はないのである。しかしながら、この一戦には、もう一つの寓意が隠されている。アーサー王の執り成しによって、“that golden chaine of concord” (3.1.12) で、二人が堅く結ばれるように、ここでは、ブリトマートの“chastity”には、ガイオンの代表する徳“temperance”に劣ることのない調節能力が備わっているということが強調されているのである。

同様に、第一巻『神聖』の騎士レッドクロス・ナイトとの出会いも、ブリトマートの“Chastity”という徳の支えとなっている“faith”の意義を強調するものであると考えられる。

マレカスタの住む「喜びの館」の戦士と戦っているレッドクロス・ナイ

トに、ブリトマートは、争いの原因を尋ね、その返答にひどく共感を覚えて、以下のように語る。

For knight to leaue his Ladie were great shame,
That faithful is, and better were to die.
All losse is lesse, and lesse the infamie,
Then losse of loue to him, that loues but one;
Ne may loue be compeld by maisterie;
For soone as maisterie comes, sweet loue anone
Taketh his nimble wings, and soone away is gone. (3.1.25)

彼女は、聖なるユーナ、“the truest one” (3.1.24) を愛し続けようとするレッドクロス・ナイトに共感し、愛は力ではどうすることもできないと力説する。ここで、彼女が、レッドクロス・ナイトと同様に、愛について、強い信念を持っていることがわかる。

しかしながら、多情なマレカスタのベッドへの侵入に気付き、憤るブリトマートには、愛を守るために必要な慎重さが欠けているのである。

On th' other side, they saw the warlike Mayd
All in her snow-white smocke, with locks vnbownd,
Threatning the point of her auenging blade,
That with so troublous terrour they were all dismayde. (3.1.63)

マレカスタが自分と同じ女性であるということに安心して、武具をつけずに眠ってしまったブリトマートは、そんな自分にも、またマレカスタにも憤りを感じて、戦士たちと激しく戦う。

しかし、戦士たちの一人が放った矢は、彼女の脇腹をかすかではあるが傷つけ、純白の肌着を朱に染める。鎧をつけていない彼女は傷つきやすいのである。結局、ブリトマートは、レッドクロス・ナイトの協力を得て、この城を立ち去ることができる。だが、これから、彼女は、レッドクロス・ナイトと同じように、鎧に幾つもの傷跡をつけられることによって、自分を知り、信じることを意味をもっと深く掘り下げなければならないと思わ

れる。

ブリトマートは、ガイアンとレッドクロス・ナイトとの出会いによって、自らの中に、“temperance”と“faith”を統合し、さらに、“unchastity”を代表するヘレノアと比較されることによって、“chastity”の一面をより具体的に示していくのである。

トロイの血筋をひく好色な騎士パリデルの誘いに対する応じ方によって、ヘレノアとブリトマートとの違いが示される。マルベッコーの妻ヘレノアが、“fraile wit” (3.9.52) をすっかり空っぽにして、パリデルに夢中になるのに対して、ブリトマートの方は、パリデルの流し目の意味を十分承知していて、適当に応じるものの、肝心な所では、パリデルの愛に答えることはない。彼女の“chastity”は、処女の女神ダイアナの養女ベルフィービーのとは異なって許容力のあるものと言える。

そもそも、雨に濡れたために、甲冑を脱ぎ、女性としての姿を現わした時のブリトマートの姿がパリデルの目を引いたのである。その時、ブリトマートの金髪は、太陽のように光り輝き、足元まで垂れ、また、服の裾も足元まで垂れていて、“carelesse modestee” (3.9.21) を感じさせずにはおかない。生命の源である太陽のように光り輝く美しさと、自然な慎ましやかさが、彼女の“chastity”には備わっている。そして、それは、パリデルの誠意のない愛の手練手管で侵されるようなものではないのである。

結局、ブリトマートは、“the flowre of chastity” (3.11.6) と言え、肉欲の象徴である巨人オリファントさえも、彼女の“the powre of chast hands” (3.11.6) を恐れるほどの存在なのである。しかし、冷酷で残忍な魔法使いビュジレインが最も手ごわい相手として、彼女の行く手を阻むことになる。

Isabel G. MacCaffrey は、甲冑の働きには、外的な力に対してだけでなく、自分の中に存在する卑俗で、破壊的な感情に対して防御となるようなものがあると示唆している⁴⁾が、外的なものではなく、内的な自己の感情を制御する甲冑の働きがはっきりと現われているのが、このビュジレインの館での場面である。

恋人のアモレットを肉欲の化身ビュジレインに奪われ、悲嘆にくれるスカダムアに同情するブリトマートは、館の入口の魔法の炎も恐れることなく、アモレット救出に出かける。彼女は、多くの部屋の戸に記された“Be bold” (3.11.50) という言葉に挑発されることなく進み、そして、ついに、“Be not too bold” (3.11.54) という言葉に出会うが、誘惑に負けて扉を開くことはない。

Thus she there waited vntill euentide,
 Yet liuing creature none she saw appeare:
 And now sad shadowes gan the world to hyde,
 From mortall vew, and wrap in darkenesse dreare;
 Yet nould she d'off her weary armes, for feare
 Of secret daunger, ne let sleepe oppresse
 Her heauy eyes with natures burdein deare,
 But drew her selfe aside in sickernesse,
 And her welpointed weapons did about her dresse. (3.11.55)

彼女は、扉の呪文の謎を解くことはできないが、この扉を開いた時に、彼女を襲うであろう暗黒の世界を予感し、甲冑を脱がず、一睡もしない。彼女の敵となる“living creature”は現われはしないが、夜が象徴する激情、劣情を誘う、目には見えない世界と彼女は戦わねばならない。ここで、甲冑は、内面のさまざまな感情がとめどなくほとばしり出るのを防ぐ働きをしていると言える。

ビュジレインは、アモレットと同じように、ブリトマートの白い胸に短剣を突き刺し、魔法で呪縛しようとする。

Full dreadfull things cut of that balefull booke
 He red, and measur'd many a sad verse,
 That horror gan the virgins hart to perse,
 And her faire locks vp stared stiffe on end,
 Hearing him those same bloody lines rehearse;
 And all the while he red, she did extend
 Her sword high ouer him, if ought he did offend. (3.12.36)

ヴィーナスの養女アモレットは、ビュジレインの剣に抵抗する術を知らないが、ブリトマートは、男性の剣には剣をもって立ち向かう。その時、彼女の髪の毛は、あまりの恐怖に逆立つのである。この時の彼女の髪は、女性の弱さ、脆さを示している。だが、彼女は、自分の中の恐怖心を男性的なもので抑えたため、ビュジレインの館は消え去り、アモレットも助かるのである。

スペンサーは、ブリトマートに、女性らしい長い金髪と、女性的価値を保護したり、調整したりする甲冑との両方を与え、他の女性とは違った特性を持たせている。MacCaffreyは、ブリトマートを、シェイクスピアの喜劇の中にもよく登場する「機械じかけの神様」的な人物で、喜劇的な役割を担っている人物だと見なしている。⁵⁾

確かに、ブリトマートは、天の意志を告げるマーリンに出会い、特別の甲冑と槍を身につけてからは、人が困っている時に登場しては、人を助ける。そして、自らも試練を受けながら、彼女は事件をもののみごとに解決していく。

ただ、彼女同様の機能を果たすと考えられているアーサー王と多少異なり、ブリトマートの方には、処女から大人の女性になる時の微妙な心の変化と、さらには、鎧の時と金髪を流す時の変化、これらの特色が与えられている。また、彼女の場合、場面により、寓意性の度合が変わってゆき、周囲に与える影響力がアーサー王より強く、彼に劣らないほどの統合力を備えていると考えられる。

この融通のきく特性が十分に活かされているのが、第四巻でのブリトマートである。この巻での主な話は、フロリメルとマリネル、アモレットとスカダムア、この二組の恋人たちの恋が成就する過程で生じる友情や恋の話である。既に、第三巻で、ブリトマートは、女性の愛を受けつけないマリネルに致命傷を負わせている。また、スカダムアの恋人アモレットを救ったのはよいのだが、ブリトマートを男性だと思っているスカダムアには、アモレットを横取りしたと、彼女は誤解されている。

ブリトマートが原因になって生じた出来事が和解に向かうのに役立っているものとして、次の二つが考えられる。それは、マリネルが倒れたと聞いて走り去る時のフロリメルの振り乱した長い髪と、“appearance”で人々に戸惑いを与えるブリトマートの甲冑である。

つまり、この『友情』の巻では、フロリメルの、風に流され、哀愁の漂う髪は、アーサー王の心さえ引き付け、また、多くの騎士たちを槍試合に結集させていると言える。そして、槍試合に集まった騎士たちの間に、友情と本当の恋を芽生えさせ、一つの“concord”を生み出していくのが、ブリトマートの甲冑という“appearance”と彼女の“reality”の一部である金髪である。“appearance”と言っても、スペンサーの場合には、シェイクスピアの場合ほど、否定的な意味はなく、スペンサーは、“appearance”の方にもかなり心を引かれていていると言えるのだが⁶⁾

第四巻の第一篇、十三は、フロリメルのための槍試合の場面ではないが、ブリトマートが女性であることを明かすことによって、ある若い騎士が仲間との友情を保つことができ、また一方では、アモレットがブリトマートに女性同士としての新たな友情を抱くことができるための重要な箇所である。

既に、以前にもブリトマートが髪を見せる場面があったが、それらは偶然によってであった。ここでは、友情を重んじるブリトマート自身の意志でなされることなのである。彼女が、かぶとの紐を解き、はらりと髪がとける様は、若い騎士の受けた恥辱とアモレットの不安を自然に取り除くのに十分役立ったと言える。

また、第四巻の中心となるフロリメルへの愛のための馬上槍試合の場面でも友情及び愛の意味がさらに追究される。この試合は男心を誘う可憐なフロリメルのために催されたものであり、友情のテーマが強調されているが、実際は、本当のフロリメルは存在せず、居るのは、魔法使いが息子のために作ってやった偽りのフロリメルなのである。ここにあるのは友情には違いなくとも、“appearance”に引き寄せられて生じたものであると言える。

この試合で、ブリトマートが、未来の夫と知らずに、アーティガルを打ち負かしてしまうのも、彼女の愛にかなうだけのものを彼が持っていなかったからなのである。もっと深みのある友情と愛が生じるのは、四巻の六篇においてである。

槍試合でブリトマートに負けたことを根に持つアーティガルと、恋人アモレットのことでブリトマートを逆恨みするスカダムアは、不思議な友情に結ばれ、二人して、彼女を倒そうということになる。

しかしながら、まず、スカダムアがブリトマートに惨敗する。アーティガルも、戦いの途中、ブリトマートのかぶとから、“a golden border” (4.6.20) のような髪の毛が現われるのを見て、戦う力を失ってしまう。

And as his hand he vp againe did reare,
Thinking to worke on her his vtmost wracke,
His powrelesse arme benumbd with secret feare
From his reuengefull purpose shronke abacke,
And cruell sword out of his fingers slacke
Fell downe to ground, as if the steele had sence,
And felt some ruth, or sence his hand did lacke,
Or both of them did thinke, obedience
To doe to so diuine a beauties excellence. (4.6.21)

金細工師もかなわないほどの美しさを備えたブリトマートの存在そのものに、アーティガルは神々しさを感じ、戦う力は萎えてしまうのである。

そして、これを見ていたスカダムアも彼女の中に “Dame natures” (4.6.24) を見出し、今までの憎しみを捨て去ることができる。キューピッドの愛の楯を持っている騎士スカダムアは、アーティガルに改めて、親しみを感じ、彼が初めて恋をし、女性に膝を屈したことを心から喜ぶのである。戦い、憎しみ、嫌悪などの不思議な道順を辿りながら、彼らはここに友情と愛を確立している。

ブリトマートは、「母なる自然」にまで寓意的レベルを上げられて描かれ

ている。だが、この後、アーティガルが、鏡の中で見た男性だと気付いた時の彼女は、屈折した愛情表現をする普通の愛らしい乙女として描かれている。この時、寓意のレベルは、私たちに最も身近な存在にまで下げられていると考えられる。このように彼女は、時に応じて、親近感を変化させる存在であり、また、甲冑で物事の調和への端緒を開き、金髪で統合していく存在と言える。

第五巻では、さらに「慈愛」のある女性へと、彼女の寓意的レベルは上げられている。別れの辛さに耐えて、アーティガルを冒険へと送り出したブリトマートのもとに、彼がラディガンドというアマゾンの女王に捕えられてしまったという不幸の知らせが届く。そして、彼女は、直ちに嫉妬の虜になってしまう。

この時の様子は、泣きじゃくったり、駄駄をこねる “wayward childe” (5.6.14) という身近な比喻で描かれているが、また、すぐに、甲冑に身を固めた、行動力のあるいつものブリトマートが示される。

試練を乗り越え、アーティガルを救うために、彼女は「慈愛」の女神アイシスの社を訪れる。この社で、彼女は、アイシスの庇護を受けて眠りにつき、不可思議な夢を見る。彼女は、その夢の謎を司祭に解いてもらい、心の乱れを鎮めて、囚われのアーティガルの所に向かう。

マーリンの時と同じように、彼女はアイシスに救いを求め、心の迷いを鎮めて、人々を許す気持ちを学ぶのであるが、この時の彼女の態度と鎧の意味は考察に値する。

Her helmet she vnlaste,
And by the altars side her selfe to slumber plaste.

For other beds the Priests there vsed none,
But on their mother Earths deare lap did lie,
And bake their sides vppon the cold hard stone,
T'enure them selues to sufferaunce thereby
And proud rebellious flesh to mortify. (5.7.8-9)

神の導きと加護を得るために、身を清め、心を鎮めることは、確かに一種の習わしである。しかし、かぶとの紐を少し緩めながらも、鎧を身につけたまま祭壇のそばに身を横たえるということは、彼女が、以前よりも、自分の感情や肉体の反逆を鎮めることができるようになったことを意味している。

アイシスの社で、ブリトマートは、物事を正しく見つめるための静かな心と、人の過ちを許す慈悲の心の大切さを知る。そこを出て、アマゾンの中で彼女が見たものは、慎しみを忘れてしまったラディガンドと、ブリトマートだけを愛しながらも囚われの身となり、女装させられたアーティガルなのである。

ここには、本質に合わない女装と男装が示されていて、ブリトマートの男装と対比されている。彼女の男装にも、ラディガンドの男装に通じる男性の攻撃性を示すものが存在するが、ラディガンドの鎧には自己の内的なものを制御する意味は付与されていない。

アーティガルのそぐわない姿を悲しむブリトマートは、ラディガンドに戦いを挑み、勝利を収める。彼女の奮闘によって、アーティガルは元通りのりりしい姿に戻り、二人は再会できるが、この二人には辛い別れが待っている。ブリトマートは、悲嘆にくれながらも、アーティガルを新たな冒険に送り出し、自らも、冒険の旅に出る。

There she continu'd for a certaine space,
Till through his want her woe did more increase :
Then hoping that the change of aire and place
Would change her paine, and sorrow somewhat ease,
She parted thence, her anguish to appease. (5.7.45)

彼女は、鏡が示した夫アーティガルから、愛と同時に悲しみを学んだと言える。しかし、悲しみを味わいながらも、冒険の旅に出かける、甲冑に身を包んだ彼女の姿には、ある足どりの確かさが感じられる。最初は、未来の夫を探す旅に出るため、危険から身を守るためにつけられた彼女の甲

冑も、今では、内なる鎧として、自然に彼女の身についたものとなっているのである。

ブリトマートの甲冑には、男性的な特質、即ち、攻撃性、勇気、自制心を示す特性があり、金髪の代表する女性の美しさ、優しさ、豊かさを補強できるものとして描かれている。この甲冑と長い髪は、外的なものを統合するだけではなく、ついには、内なる領域の統合にも不可欠なものとなっている。

スペンサーは、ブリトマートが時折見せる光り輝く金髪に、時にシンボルを越えた特性、つまり、乙女から大人の女性へという過渡期にある女性が無意識に漂わせるそこはかとなない色香を与え、彼女の統合的機能に幅を持たせていると言える。男性的な特性と女性的な特性とを調和させて、神の愛、夫の愛を支えに愛につきまとう悲しみと戦いながら、これからも冒険を続けていくであろうブリトマートの姿には、スペンサーが重んじた「調和」、そして、「無常の中の永遠」が見てとれるのである。

注

- 1) 『妖精の女王』からの引用は、すべて、*The Poetical Works of Edmund Spenser*, ed. J.C.Smith and E. de Selincourt, Oxford Standard Authors (London: Oxford University Press, 1977) に拠る。
- 2) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A.C.Hamilton, A Longman Paperback (London and New York: Longman, 1980), p.321 参照。
- 3) Maurice Evans, *Spenser's Anatomy of Heroism: A Commentary on The Faerie Queene* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), p.151.
- 4) Isabel G. MacCaffrey, *Spenser's Allegory: The Anatomy of Imagination* (Princeton: Princeton University Press, 1976), p.286 参照。
- 5) *Ibid.*, p.307 参照。
- 6) Haruhiko Fujii, "Juxtaposition of Ideas in *The Faery Queene*," in *Poetry and Drama in The Age of Shakespeare -Essays in Honour of Professor Shonosuke Ishii's Seventieth Birthday*, ed. Peter Milward and Tetsuo Anzai, Renaissance Monographs: 9 (Tokyo: The Renaissance Institute/Aratake Shuppan, 1982), p.82 参照。